

インドネシア西カリマンタンにおける 1967 年華人追放事件の経緯

松村 智雄

はじめに

本論文は、インドネシア西カリマンタンの社会構造を大きく変え、現在の西カリマンタン社会の原型を形作った 1967 年華人追放事件の経緯を論じるものである。これまでこの事件については、インドネシア、マレーシア国境地域で当時活動していた共産主義ゲリラを華人が援助しないように、彼らを物理的に西カリマンタン内陸部から追放するというインドネシア国軍の作戦の側面から論じられてきた [Davidson 2002, Davidson 2008, Somers Heidhues 2003]。

これらの先行研究は、この事件をインドネシアの政治史の中に位置づけ、後述する 1965 年 9 月 30 日事件の余波として、共産主義者が排撃される中で、共産主義者と関わりのあるとされた華人が内陸部から追放されたとモデル化している。そこでは、どの地域でも一律に華人が先住のダヤク人 (Dayak) に追い立てられて内陸部から追放されるというストーリーが描かれた。他方、この記述方法では、この事件生起の経緯の地域差については具体的に触れられることはなかった。

しかし、本当にこの事件の起こり方に地域差は無かったのだろうか？ この論文において追究する課題はこれである。

西カリマンタンの客家人⁽¹⁾は、元来 18 世紀に、同地に複数存在したスルタン (イスラムを奉じる王) を中心とするムラユ人 (Melayu) の王国が、南中国 (主に広東省) から呼び寄せた金鉱労働者の子孫である。現在の西カリマンタンからマレーシア領サラワクにかけては、18 世紀から 19 世紀にかけて金の採掘が盛んであった。中国からの移民は、男性が単身でやってくる場合がほとんどであったため、彼らは西カリマンタンに住んでいたダヤク人やムラユ人の女性と結婚して子をもうけた。

この客家人社会は、19 世紀にはムラユ人スルタンの支配から次第に独立し、カプアス川流域のマンドル (Mandor) に位置した蘭芳公司、北部のモントラド (Monterado) に位置した和順公司といった自律的な政体を持つようになった [李 2003:120-122]。彼らの勢力範囲は現在の西カリマンタン北西部のサンバス (Sambas)、シンカワン (Singkawang)、ブンカヤン (Bengkayang) 一帯と、カプアス川流域のマンドル、アンジュンガン (Anjunan) を中心とする地域に広がっていた。しかし、本論で述べる 1967 年華人追放事件以降、彼らは内陸部から追われ、専ら西海岸部のシンカワン、ポンティアナック (Pontianak) 周辺に住むようになった。19 世紀中葉、内陸部の金が枯渇した後、内陸部の客家人は、主に稲作やゴム園経営を生活の糧にしていたのだが、1967 年、彼らは農地や財産を全部故地に置いて、身

一つでシンカワンなどの西海岸部に難民となって流入したのである。彼らは生活手段を丸ごと失ったも同然であった。西カリマンタンでは就労機会も限られていたので、ジャカルタやサラワクに行って就職する事例、あるいは両親が子どもを台湾人、香港人男性に嫁がせる事例が 1980 年代初めから起こってきた [Somers Heidhues 2003:253f.]。

1. 背景

1967 年華人追放事件に関連し、西カリマンタンの地理上の特徴として決定的に重要なのは、隣国マレーシアのサラワク州と国境を接しているという点である。なぜなら、国境をサラワクと接していたがために、同じく華人を主体とするサラワクのゲリラ活動家を、西カリマンタンの華人も支援しているという嫌疑をかけられることになったからである。

客家系華人は、元来内陸部に広く居住していたのだが、前述のように華人追放事件以降、西側沿岸部に多くなり、シンカワン周辺は客家系が主流となった。一方、ポンティアナックでは潮州系華人⁽²⁾が主流である。客家系華人と潮州系華人の話し言葉は互いに意思疎通ができないほど異なっている。

西カリマンタンの全人口に占める各民族の割合は、ムラユ人 40%、ダヤク人 40%、華人 15%、その他 (ジャワ人、マドゥーラ人⁽³⁾ など) 5%である [Somers Heidhues 2003:259]。

華人追放事件について考える場合、ブミプトラ (土地っ子) とされるダヤク人について触れる必要がある。彼らは現在においても西カリマンタン内陸部に住んでおり、油椰子の大規模農園での労働、小規模なゴム樹液採取、稲作によって生計を立てている。彼らの間には元来ダヤク人であるという認識はなく、カナヤン人やイバン人のような文化風習、言語を同じくする集団ごとの民族意識が存在した。ダヤク人という呼び名はオランダ人によって西カリマンタンのイスラム化されていない人々の総称として使われ始めた [Somers Heidhues 2003:23]。現在においてもダヤク人同士が出会った場合、彼らは出身地による区別を非常に重視している。

これに対して、ムラユ人は自らをイスラム教徒として規定するという特徴がある⁽⁴⁾。スルタンをいただく西カリマンタン西海岸のムラユ人王国の伝統についてはすでに触れたが、王国を中心として原住民たるダヤク人は次第にムラユ化、つまりイスラム化していった。彼らが現在のムラユ人を構成している。もちろんマレー半島やスマトラからの移住者がイスラムを広めたのであるが、次第に西沿岸部でダヤク人の中にイスラムに改宗する人々が増え、彼らもムラユ人とみなされるようになった。現在でもダヤク人がイスラムに改宗した場合、当人はダヤク人社会から排除されてしまう。

華人との関係に関して重要なことは、19 世紀以前、単身で中国から渡ってきた客家人男性と結婚するダヤク人女性が多く、通婚が進んでいた点である [Somers Heidhues 2003:26f.]。現在のダヤク人の間でも親族の中に華人がいる人も一定程度おり、一部のダヤク人

の間には中国起源の「姓」が引き継がれている。ダヤク人と華人の間の親和性は、ダヤク人が華人をソバット (sobat) と呼ぶところにも表れている。ソバットはインドネシア語のサハバット (sahabat) にあたり、「親友」という意味である。華人もダヤク人との関係について語る場合に「ダヤク人と華人はソバットである」と表明することが多い。

なお、ポンティアナックを中心とした地域には、商業に従事する潮州人が居住していることは先に述べた。ただし1967年華人追放事件との関わりが深いのは、内陸部に展開していた客家人社会であるので、潮州人については本論文の対象からは除外する。

前述したように、オランダ時代から非常に独立性の高かった西カリマンタンの客家系華人社会であるが、彼らは金鉱開発、農業（稲作、ゴム農園運営など）、漁業に従事していた。彼らの社会はソマーズ・ハイトヒューズ (Mary Somers Heidhues, 1936-) の言葉を借りると「熱帯の小中国」の様相を呈していた [Somers Heidhues 2003:12]。

この客家系華人社会は、20世紀の中国での政治変動に敏感に反応した。彼らの社会は、交易活動を通じてシンガポールとの関係が強く、日本軍が統治した時代には、反日運動においてシンガポール華人との協働も見られたようである [Hui 2007:43-69]。日常的なシンガポールとの商取引を通じて、彼らは中国人としての意識を保ち続けた [Somers Heidhues 2003:265]。

当然、1949年の中華人民共和国の成立は、西カリマンタンの華人にも衝撃をもって受け止められた。1950年代を通して、中華人民共和国支持者と台湾の国民政府支持者の間での抗争が繰り広げられたという [南中特刊委員会 2009]。この時代は西カリマンタン華人が政治的、また経済的にも活発であった。しかし、政治的とはいってもインドネシアの政治に関わるのではなく、中国人としての意識のもと、中国の政治に関わるという姿勢であった。

彼らの環境を見ても、日常的に中国語紙を購読し、彼らの子女は中国語学校で教育を受けた。彼らは日常的に中国語（公的な場では北京官話、日常生活では客家語や潮州語）を用いており、インドネシア語の普及はなかった [成 2008]。

1950年代の西カリマンタンの状況はおおよそ上に記述した通りである。彼らはインドネシアという国家とはほぼ無関係に生活していたのである。

ところが1960年代になって、西カリマンタンが、マレーシアのラーマン首相 (Tunku Abdul Rahman, 1903-1990) が唱えたマレーシア連邦構想に抵抗する共産主義ゲリラの活動の舞台になったことが、この地域の華人の命運を左右することになった。

その転機となったのは1965年9月30日事件である。1965年9月30日事件とは、スハルト (Soeharto) 政権 (1968-1998) の成立の契機となった事件である。1960年代前半、スカルノ政権は左傾の度を強めており、スカルノ (Soekarno, 1901-1970) の支持を得たインドネシア共産党の勢力は強まるばかりであった。このような状況の中、インドネシア陸軍中の共産党寄りの人物が、スカルノを擁護するためとして首都ジャカルタでクーデターを起こ

し、6 人の陸軍高官を深夜に暗殺した。事件の背景にインドネシア共産党が存在していることに疑いを持たない陸軍、そして、陸軍のトップに上り詰めようとしていたスハルトは、この事態を收拾するために共産党員とその同調者に対して容赦ない弾圧を行い、治安維持を図った。その後スハルトは陸軍を統制し、2 年後の 1967 年に正式に大統領となる。この事件以降、インドネシア共産党、共産主義と関わりがあるとみなされたすべての機関が解散となっただけでなく、国軍や一般民衆による残虐な「共産党狩り」が行われた。また、インドネシアでは共産主義者は国家の敵とされ、その後成立するスハルト政権は強力な反共政策を展開していく。

西カリマンタンにおいては、スハルト政権の反共政策の影響によって、国境地帯で活動していた主にサラワク出身の共産主義ゲリラの活動家を支援する可能性があるというので、西カリマンタン内陸部に展開していた客家系の華人は、インドネシア国軍によって居住地を追われ、監視のしやすいように沿岸部の土地に住まわされた〔戴 1974, Mackie 1976:127, Coppel 1983:145-149, Somers Heidhues 2003:243-255〕。

マッキー (J. A. C. Mackie, 1924-2011) は、この文脈において、国軍が多く展開していたマレーシア国境地帯の他、遙か南に下ったカプアス川流域においてもダヤク人による華人追放が「自然発生的に」起こっていることに注意を促しつつも、これがどのような経緯で起こったのかは不明としている。この地域差は、上述した「国軍による共産主義者排撃」というだけでは説明できない。

一方、香港の『ファー・イースタン・エコノミック・レビュー』*Far Eastern Economic Review* に掲載されたフェイス (Herbert Feith, 1930-2001) の論考は、この事件に関してまったく別の視点を提供した。それは、一般にはインドネシア国軍が原住民のダヤク人を扇動して内陸部の客家系華人を追放したと理解されているものの、ダヤク人も国軍の言いなりに行動したわけではないというものである。特に、ダヤク人の間でカリスマ的存在であった当時のウファン・ウライ (Oevaang Oeray, 1922-1986) 西カリマンタン州知事⁶⁾ が、華人を追放した後に、ダヤク人が政治的、経済的に優位となる領域をカプアス川流域に作るようとしていたことを述べている [Feith 1968]。この視点は、マッキーの残した疑問に答える手掛かりともなりうるものであった。

一方、サラワクでのゲリラの活動に関しては、近年着々と研究成果の蓄積が見られる。ポリット (Vernon Porritt, 1926-) は、マレーシアに残された公文書を用いてサラワクの共産主義運動の盛衰を描いている [Porritt 2004]。しかし彼は、共産主義ゲリラの活動家の手による中国語の資料をまったく用いていない。

これに対して、原不二夫 (1943-) はサラワクゲリラを中心に記述しているが、西カリマンタンでのゲリラの活動についても触れている点で画期的である [Hara 2005, 原 2009]。この研究の特徴は、ポリットの研究と異なり、サラワクゲリラの手による中国語の原資料、聞き取りに基づいている点である。しかし、彼の研究対象は華人追放事件の経緯ではなく

あくまで共産主義運動であるため、華人追放事件そのものに関する記述は少ない。西カリマンタン華人の歴史を包括的に描いたソマーズ・ハイトヒュースでさえ、この事件の経緯について簡単に触れるに留めている。その中でも軍の役割、ダヤク人側の動きなどについては不明瞭な点が多いとして慎重に断定を避けている。

ここまで紹介した研究では、この事件の細部は語られず、「華人は共産主義勢力と同一視され、反共のスハルト政権指揮下のインドネシア国軍と、それに扇動されたダヤク人住民によって内陸部から追放された」というひとつのストーリーを描くことで説明されてきた。

この状況に一石を投じたのがデイヴィッドソン (J. S. Davidson, 1978-) の研究であった。彼は当時この地域を管轄したインドネシア国軍の資料を用い、華人追放の具体的な経緯を初めて明らかにしたのである。これにより、国軍が具体的にどのようにダヤク人を扇動したのかが分かるようになった。ただ、この研究には限界もあった。それは、ほぼインドネシア国軍の資料だけに依っているために、研究が軍の現状認識に影響を受けるのを避けられないという問題である。

1967年華人追放事件に関する最新の研究として、シンガポール出身の広東系華人の出自を持つ許耀峰 (Hui Yew-Foong, 生年不明) によるものが挙げられる。彼の論文は管見の限りシンカワン周辺で中国語を用いてインタビューを行った人類学者の初の成果であり、1967年当時を経験した人々の貴重な証言をもとに記述されている [Hui 2007]。この論文には、追放事件を経験した人々の個人的な追想がそのまま記述してあり興味深い。誰にとっても共通の客観的事実は存在しえないという立場のポストモダン人類学の方法論を取っているために、彼らの語りを総合して真実に迫ろうという意図は希薄である。彼の関心は、西カリマンタン、特にシンカワン周辺の客家系華人のアイデンティティーにあり、当時どのような事実関係があったのかという問題意識では取り組んでいない。また、記述の対象が華人社会に限定されているために、ダヤク人、ジャワから派遣された軍人の動きが複雑に絡むこの事件に関して資料とするには不十分の感はぬぐえない。

このような背景のもとに筆者は、地域ごとの事件の起こり方の特徴、そしてそれらが起こった地域ごとの背景に留意しつつ、この事件の持つ多面的な性格を浮き彫りにしたい。

2. 華人追放事件に至る経緯

華人追放事件が起きる発端となったのは、西カリマンタンのインドネシア共産党の活動であった。彼らの活動がジャワからの軍部の干渉、サラワク共産主義ゲリラとの協働などを招き、普通に生活していた華人までも「共産主義者」のレッテルをはられて追放されるのである。

1960年代初め、インドネシア共産党西カリマンタン支部を率いたソフィアン (Said Achmad Sofyan, ?-1974) は、貧困の中にある現地の華人社会への働きかけを強めた。その結果、イ

インドネシア共産党西カリマンタン支部は急成長した。彼は個人的にも華人と親しく、その温厚な性格は周りの華人からも慕われていた。彼自身はアラブ系のムスリムなのだが、華人は彼のことを大兄 (tai ko) と呼んで慕っていたという [Davidson 2002:59]。また彼は、インドネシア国軍や州政府とも良好な関係を築いていた。

1960 年代初め、マレーシアのラーマン首相は、マレー半島の諸州、シンガポールに加えて、ボルネオ島のサラワク、サバ、ブルネイを含む形でのマレーシア連邦結成構想を掲げた。ブルネイのスルタンはこの構想に同調していた。しかし、ブルネイ生まれでインドネシア独立戦争にも関わったアザハリ (Sheik A. M. Azahari, 1928-2002) は、この構想に反対してブルネイ人民党を結成し、スルタンに対して反乱を起こした。彼が目指したのは、ブルネイ、サバ、サラワクから成る北カリマンタン独立政体の結成であった。この反乱はイギリスの部隊によってすぐに鎮圧されるのであるが、その後インドネシアに逃れたアザハリは、マレーシア連邦結成をイギリスによる再植民地化と批判するインドネシアのスカルノの支援を受けた。これにサラワクの華人主体の共産主義ゲリラも合流するという展開となった。

1963 年 9 月、マレーシア連邦が成立すると、スカルノは表立って「マレーシア粉碎 (Ganjang Malaysia)」を呼びかけるようになった。これをインドネシア史ではコンフロンタシ (konfrontasi, 「対決」の意味) と呼ぶ。

インドネシア政府の後援、アザハリのブルネイ人民党との協力を受けて、サラワクでは、それまでであった華人主体の共産主義ゲリラが組織化されて、1964 年にサラワク人民遊撃隊 (Pasukan Gerilya Rakyat Sarawak, PGRS; 中国語名、砂拉越人民遊撃隊)、1965 年に北カリマンタン人民軍 (Pasukan Rakyat Kalimantan Utara, PARAKU; 中国語名、北加人民軍) の 2 つのゲリラ組織が結成された。前者はサラワク西部を、後者はサラワク東部を管轄した。どちらも西カリマンタンとの長大な国境付近で反マレーシア連邦闘争を繰り広げ、形勢が危うくなるとインドネシア領に逃げ込んで反撃を繰り返した。サラワクの反政府勢力は、マレーシア政府にとっての悩みの種であった。さらに西カリマンタンのソフィアン率いるインドネシア共産党勢力、ジャワからの志願兵もインドネシア政府の強力な支持の下、マレーシア連邦に抵抗した [Mackie 1976:126-128, Coppel 1983:145-149, Davidson 2002:55-58, 原 2009:163-171]。

この状況を一変させたのが前述した 1965 年 9 月 30 日事件であった。事件が起きた直後、西カリマンタンではジャワやバリで起こったような、共産主義者への同調者に対する広範囲の虐殺行為が広まるということにはなかった。しかし左派系の新聞が発行停止となったり、西カリマンタン州政府によってインドネシア共産党は非合法化されたりした。また、インドネシア全土に言えることだが、西カリマンタンにおいても中国語学校は閉鎖された。1966 年、インドネシアはマレーシア政府と和解し、それまでの「対決」を撤回した [Davidson 2002:57]。

インドネシア国内で短期間に起こったこの政治変動によって、西カリマンタンの共産主義勢力は宙に浮くことになった。それまで彼らを後援していたインドネシア政府が一転して、彼らを排撃する側に回ったからである。これ以降、彼らはインドネシアの後援なしにマレーシア政府との孤独な戦いを展開することになった。

9月30日事件の特徴は、この事件の影響が関係者だけでなく、何の関係もない「市井の人々」の生活まで変えてしまったことである。西カリマンタンの華人はそれまでインドネシアの政治には関わってこなかった。しかしインドネシア国軍が、彼らと、同じく華人が多くを占めていたサラワクゲリラとを同一視し、ゲリラを援助しているのではないかという疑いをかけたことにより、彼らにとってもこの政治的事件は他人事ではなくなってしまったのである。

ここで主要アクターであるインドネシア国軍の編成について簡単に整理する。

西カリマンタンを1950年代から統括していたのは、タンジュンブラ第12軍管区(Komando Daerah Militer XII Tanjungpura)である。9月30日事件以降もタンジュンブラ第12軍管区の軍人は、共産党勢力の討伐に消極的であった。軍人とソフィアン率いるインドネシア共産党との個人的関係がものを言ったのである。当時タンジュンブラ第12軍管区を率いたリャクドゥ(Ryacudu, 生歿年不明)は、追跡されるソフィアンと友人関係にあったため彼を数日間かくまっていた[Davidson 2002:57]。インドネシア国軍中央としてはゲリラの野放し状態を放っておくわけにはいかなかった。

親共産勢力とみなされたリャクドゥは更迭され、1967年6月29日、代わってジャワから反共色が強くスハルトの支持の厚い、バンドンに根拠地を置くシリワンギ(Siliwangi)師団が新しく導入された。この部隊を率いたのはダルル・イスラム運動(Darul Islam)鎮圧⁶⁾、スマトラのインドネシア共和国革命政府(Pemerintah Revolusioner Republik Indonesia, PRRI)鎮圧⁷⁾などに功のあったウイトノ・サルソノ(Witono Sarsono, 生歿年不明)であった[Davidson 2002:61]。彼が軍を率いた時代に華人追放が起こるのである。

デイヴィッドソンは、国軍が作戦を展開した内陸の北部国境地帯(ブンカヤン、サンガウレド周辺)以外に、西海岸部に近いカプアス川流域でも華人追放が起きている理由について、ダヤク人は軍人の操り人形であったのではなく、ダヤク人の中で尊敬されていたウライ州知事のイニシアチブによって、ダヤク人が立ち上がったのだとする[Davidson 2002:70f.]。カプアス川流域の主要都市であるアンジュンガン、マンドル付近も、北のサンバスと同様に華人が多く住み、華人が発展させた市場は栄えていた。ダヤク人の扇動のために彼は国軍に利用されたとも言えるが、彼自身も華人を内陸部のカプアス川流域から追い出すことで華人による経済支配から脱し、ダヤク人によるダヤク人のための地域を作るという理想を持っていたようである。この理想は実現することなく、華人追放が済んだ後、彼は国軍によってジャカルタに「左遷」された、その後1986年に亡くなるまで、彼はジャカルタの国民議会議員を務めた[Davidson 2002:71f.]。

ダヤク人による反華人示威行動は各地で起こった⁸⁾。華人追放は様々な起こり方をした。ダヤク人による華人の虐殺が起こった事例があれば、ダヤク人に出ていくように言い渡されて華人が自主的に出て行った事例、あるいはダヤク人は関与せず、国軍の車で華人が「護送」される事例など多様な形態があったと言われている。

デイヴィッドソンは、具体的な例は示していないものの、1967年に起きた事件を3つに分類している。1つ目は、ダヤク人による大規模な華人追放である。2つ目は、国境地帯における国軍のゲリラ掃討作戦である。3つ目は、西側沿岸部、シンカワン近郊で起きた国軍兵士による華人住民、難民に対する暴力的な事件である [Davidson 2002:72]。

このうち、2つ目のゲリラ掃討作戦は1967年10月に始まるとされる華人追放事件以前から持続的に実行されてきたのであるが、それが功を奏さないことからより根本的な解決策が求められ、それが1つ目の華人追放の実行に結実した。華人は内陸の故地から追放され、沿岸部に移動を強制されるが、そこでも軍による抑圧が待っていた。これが3つ目の内容である。

では、インドネシア国軍が華人追放という劇的な方法を探ろうと決断した契機は何だったのだろうか。

3. 1967年華人追放事件の実相

(1) サンガウレド国軍基地襲撃事件

1967年7月まで、インドネシア国軍は決定的な解決策を見いだせずにはいた。インドネシア国軍をして、解決を急がせることになった動きが1967年7月にあった。サラワク人民遊撃隊(PGRS)とソフィアンらの部隊が共同して、国境近くにあるサンガウレドの空軍基地を襲撃し、武器弾薬を多数奪うという事件である。これについて、ソフィアンらの部隊に同行した林世芳(1945-)は著書の中でこう書いている。

1967年4月、サラワクゲリラの指導者、林和貴、黄紀暁(黄漢)、西カリマンタン共産党関係のソフィアン、陳武侠、王明が協力して革命武装闘争を展開する準備を行い、その根拠地をブンカヤン近くの火焰山(Gunung Bara)に置き、自分たちの部隊を「火焰山部隊」と名付けた。

サラワクとの国境近くに位置するサンガウレドの華人はサラワクの革命者の影響を受けており、スハルトの反共・反華人的な性格に不満を持っていた。彼らは1967年4月より民兵としてサラワクゲリラの訓練を受けていた。1967年7月13日、我々はインドネシア軍のリーダーが7月17日にサンガウレド飛行場に視察に訪れるという情報を入手した。これに合わせて戦闘開始ということが会議で決定された。革命闘争において最も重

要なのは、人民群衆の蜂起であり、遊撃隊にはそのための銃が決定的に不足していた。これが武装闘争の主要な問題であった。[中略] 7月16日午前2時、我々戦闘隊員は、空軍基地に潜入し50丁のライフル銃、50丁のピストル、数十箱の弾薬を奪った。

[林 2010:69-71]

この事件はインドネシア軍に衝撃を与えた。スハルトはすぐにジャカルタにて西カリマンタンの軍指導者たちと会合を持っている。8月初めには、インドネシア国軍は陸軍空挺部隊 (Resimen Para Komando Angkatan Darat, RPKAD) というパラシュート特殊部隊をこの地域に導入した。総力を挙げてゲリラを掃討することが至上命令となったのである [Davidson 2002:62f.]。

ダヤク人の戦争開始の合図として知られる赤い鉢 (Mangkok Merah) は、華人追放事件との関連が以前から指摘されている。ダヤク人は村落間での情報伝達に、壺の上に鉢を載せたものを用いていた。鉢が村落間で回されることで特定の情報が伝達されるのである⁹⁾。例えば中身がウコン (鬱金, *kenyit*) と米 (*beras*) の鉢の場合、伝達内容は「和解, 平和, 停戦」である。一方赤い鉢にはジュラナン (*jeranang*) という赤い染料, 茅 (*cucuran atap daun*), 先を尖らせた竹が入っている。赤い染料は「警戒」を, 茅は雨を表す。伝達内容は「急いで出発」である。先を尖らせた竹は「村落共同体で協力しなければならない」というメッセージを持っている¹⁰⁾。赤い鉢は戦争の開始を表すものであった。

当時、西カリマンタンの内陸部でカトリック教会の活動に従事していたファン・フルテン (Herman Josef van Hulsten, 1907-?) 神父はその回顧録の中で、赤い鉢の儀式的後にダヤク人による大々的な示威行動が起こったとしている [Hulsten 1992:280f.]。一方タンジュンプラ第12軍管区の専属神父であったイサク・ドゥーラ (Isak Doera, 1966-1971年に西カリマンタンで勤務) 神父¹¹⁾ は、その回顧録の中では赤い鉢について直接触れてはいない [Doera 2003]。しかし、筆者がドゥーラ氏に対して直接行ったインタビューの結果、おおよそ次のような情報が得られた。

赤い鉢の伝統は、すでに19世紀には消えていたのであるが、軍人がこれを蘇らせたという。軍人は最初、何とかダヤク人の華人への敵意を掻き立てるために、ダヤク人首長を村の郊外にピクニックと称して連れ出し、彼らを殺害した。そしてこの殺人事件を華人の共産主義ゲリラの仕業に仕立て上げた。ドゥーラ神父自身も、すでにカトリックに改宗していたその殺害された首長の埋葬の儀礼を、軍専属の神父として2人ずつ6回にわたって執り行ったことがあるという。しかし、この時点でもダヤク人は華人に対して蜂起しようとはしなかった。それまでのソバット (親友) としての関係のためである。ダヤク人の中でも、カトリックに改宗した人々、また彼らが支持するカトリック党 (Partai Katolik) の人々は、赤い鉢を村落間で回すことに反対したという。まだキリスト教化されていなかったマニユケ人 (Manyuke) と呼ばれるダヤク人の中の一種族が赤い鉢の儀礼を行い、華人追放に

直接関与した。ドゥーラ神父は、マニユケ人の華人追放事件への関与を特に強調した。軍人はマニユケ人の首長たちを集合させ、お金を渡して赤い鉢を回すように命じた。赤い鉢が回された範囲は、シンカワンやブンカヤン地域を含む当時のサンパス県、及びカプアス川流域であった。ドゥーラ神父は、この事件は確実に国軍によって仕組まれたものであると断言した。この作戦について、カプアス上流のシンタン(Sintang)やカプアス・フル(Kapuas Hulu)のダヤク人は拒否したという。また、華人が残した財産は占拠したダヤク人全員によって山分けされた⁽¹²⁾。以上のようにドゥーラ神父は筆者に対して語った。

ファン・フルテンは著書の中で、1967年10月に起こったダヤク人の示威行動は入念に計画された蜂起であると述べている。最初「赤い鉢」の儀式では、「殺してはならない」、「家を焼いてはならない」ということがダヤク人の規範とされ、火器を持つことも禁止された。その後マニユケ人が他のダヤク人の感情を煽り、乱暴なことを行い始めたという [Hulten 1992:280-283]。

ウライ州知事は華人から本来ダヤク人の土地であるアンジュンガンを取り戻すということを目指していた。ファン・フルテンの著書によると、大蜂起の前にウライは、ダヤク人のカトリック党(Partai Katolik)関係者に協力を求めに来ているようである。ところが、ウライの蜂起の案はカトリック関係者には受け入れられず、その後カトリック勢力の示威行動への協力が得られないと悟ったウライは、次はダヤク人の中でもカトリック化されていないマニユケ人の首長たちに会った。マニユケ人の集落には、ドクン・アケ(Dukun Ake)という霊能力を持つ人物がおり⁽¹³⁾、戦争の儀礼と憑依を司っていたと書かれている。このうち、カトリック党に関する記述は、筆者の行ったドゥーラ神父へのインタビューと符合する。赤い鉢を受け取る儀礼に臨む場合、ダヤク人は褐色の服、赤い鉢巻を付けることが儀礼上決まっていた [Hulten 1992:284]。また、ウライの役割についてドゥーラ神父が語ったところによると、丁度赤い鉢が回された1967年10月に、ウライは各地のダヤク人の首長をポンティアナックに集めて、共産主義者に対してダヤク人が立ち上がるべきことを説き、戦争開始の宣言をしたという⁽¹⁴⁾。ダヤク人に慕われていたウライのこの発言と、「赤い鉢」が回された時期がほぼ同時であることは強調されてよいだろう。

11月ごろから現れる、赤い鉢巻を付けたダヤク人はこの系統だと考えられる。この赤い鉢巻姿のダヤク人は、後に紹介するゲリラ側の文献、カトリック関係者の文献、筆者の行ったインタビューに必ず登場する。そして、これまで指摘されてこなかったが、象徴的なことに、現地の客家人社会の中では、この事件は「紅頭(Fung Theu)事件」として記憶されている。この「紅頭」はまぎれもなくダヤク人が頭に締めていた紅い鉢巻を表しており、彼らが闘いに臨むいでたちで華人の集落に現れたことを示している。

ダヤク人の示威行動において、最初、モノの略奪、放火は厳しく禁じられていた。ところが、次第に激しさを増していき、家を燃やしたり華人を殺害したりするようになった。インドネシア国軍はその場にいたのであるが、ファン・フルテンによると、マニユケ人に

よる度の過ぎた示威行動を見て見ぬふりをしていたという [Hulten 1992:288]。

少なくとも1967年10月以降、西カリマンタンの内陸でさまざまな形で華人追放が起きたことは事実であり、それにダヤク人が関わっていたことは確かである。では次に具体的な例を幾つか見たうえで、それらを比較してみよう。

(2) 華人追放事件の例

マレーシア、インドネシア国境から遠く、西海岸に近いカプアス川流域におけるダヤク人による略奪行為について、デイヴィッドソンは次のように書いている。「1967年11月半ば、スナキン (Senakin) で最初にダヤク人による略奪が起こった。ここでは、ダヤク人がそこに居住する華人を脅す挙に出ている。華人がダヤク人群众に向かって威嚇発砲をした際、ダヤク人2人を負傷させ、1人が死亡した。その次の日ダヤク人は復讐し、多くの華人を殺害した」 [Davidson 2002:67f.]。

この事件について、前出のドゥーラ神父は筆者に対し次のように語った。

1967年11月12日、パフマン (Pahauman) で華人の家屋、市場が荒らされている跡を見た。その帰り道、スナキンで放火の真っ最中のダヤク人を見る。川には約20体の華人の死体が浮いていた。多くの赤い鉢巻をしたダヤク人が華人の家を焼いて狼藉をはたっていた。私は彼らに近づき、大きな声で叫んだ。「焼くのを止めろ、止めなければお前たちを逮捕するぞ」。ダヤク人たちは「最初に焼いたのは自分ではない」と口ぐちに言い、怯えた様子であった。私が厳しい口調でたしなめると、ダヤク人たちは「もう焼かない」と約束した。ポンティアナックに向かう道すがら、スナキンの華人の家から略奪した家具類を抱えて歩くダヤク人を見掛ける。嘆かわしいことである。この日、ダヤク人は皆勝利に酔っていた。⁽⁴⁵⁾

最初穏やかに始まったダヤク人による破壊行為は、徐々に過激化していった。彼はマニユケ人の関与がその原因と分析する。またパフマンの略奪時には、マドゥーラ人やムラユ人が先に略奪を始め、その後ダヤク人が加わったと述べ、華人の住居、市場の破壊には、ダヤク人だけでなくマドゥーラ人やムラユ人も関わっていたことを強調している [Doera 2003:118]。これは従来の研究では触れられていなかった点である。

スナキンの略奪については華人側の記述も残っている。ここでは多くの華人が殺害されたとデイヴィッドソンは書いているが [Davidson 2002:68]、林世芳の記述によれば、実際には殺されたのは20数名であったことが述べられている。

スナキンは交通の便のよい場所であり、多くの華人が店を構えていた。9月30日事件

の後、この地域の情勢は不安定になった。この地域を統括する軍人 HNF 少尉 [著者、林世芳の方針として実名を伏せている：引用者注] は住民を武装させた。ところが、1967 年 7 月中旬、ポンティアナックから上位の軍人がスナキンにやってくる、HNF 少尉に住民を武装させるのは止めるように言った。そして華人をすべて沿岸部まで護送することを求めた⁽¹⁶⁾。HNF 少尉からこの話を聞いた時、村全体が混乱状態に陥った。スナキンにあった十数の道路工事に用いたトラックで 600 人あまりの住民は護送された。もともとポンティアナックの収容所送りであったが、軍の作戦が変わり、彼らは日本溝⁽¹⁷⁾に送られることになった。この地方は沼地が広がっており、交通が大変不便で外界から隔離された僻地であると言ってもよい。軍人は彼らに、自分で木を切って住みかを作るように命じた。餓死する人、病気で亡くなる人は移住者の半数に及んだ。スナキン事件は華人が多く殺害された事件として伝えられているが、本当のところスナキンに居残ったためにダヤク人に殺害された華人は 20 人ほどであった。そうではなくて、真に悲惨だったのは、日本溝に移された人々が飢えや病気のために 300 人ほど命を落としていることである。

[林 2010:24f.]

その他の地域の追放事件を総括してドゥーラ神父は次のように述べる。

西カリマンタン州最奥のカプアス・フル (Kapuas Hulu) やカプアス川のかなり上流に位置するサンガウ (Sanggau) などの内陸部では、華人追放にはダヤク人は関わっておらず、軍隊の命令下に華人が移動した事例がほとんどであった。華人はしばらくして元の場所に戻ってきたので経済的打撃はほとんどなかった。西海岸部に近いサンバス及びカプアス川流域の状況はこれとは異なり、華人が手入れをしていた水田、ゴム農園も放置された。内陸諸都市を結ぶ長距離バス運転手も大半が華人であったため、移動手段が無い状態に陥った。

[Doera 2003:132f.]

一方で、マレーシア、インドネシアの国境に近い地域の華人追放はどのように起きたのであろうか。

西カリマンタン北西部に位置し、国境近くのサマランタン (Samalantan) で筆者がインタビューしたダヤク人村民は、当時の状況について、以前は華人が多く居住し、農業をする人々、店を構える人々が多かったが、1967 年以後、華人が住んではならない地域となったと述べた。1967 年以前には、街の表通りには華人が商店を構えており、活況を呈していたという⁽¹⁸⁾。

サマランタンのダヤク首長トーマス・ムラド (Thomas Murad, 生年不明) 氏は、「当時ダヤク人は、華人と近い関係にあり、軍からもそう思われていたが、自分たちは決して華人側には付かないこと、インドネシア政府 (スハルト体制) のために貢献できることを証明

(demonstrasi) したのである」と説明した。また彼は、ダヤク人全体の利益のために立ち上がったウライ州知事の考えに共鳴した、とも話した。彼自身も、華人追放に大きな役割を果たしたマニユケ人と呼ばれるカプアス川流域に故地のある民族集団に属し、1967年にサマランタンに移り住んだという。彼は現在でも華人が残した机や棚などの家具を使用している⁽¹⁹⁾。

その他、特に衝撃的だったのはブンカヤン近くのマジユン村 (Majun) での虐殺である。マジユン事件とは、J [匿名] 警察隊隊長という人物がダヤク人蜂起後に村にやってきて、住民を保護すると称して住民を一か所に押し込め、毎晩10人ほどずつダヤク人を使って殺害していた事件である。事態を知った住民が混乱状態に陥ると、彼は翌日、大勢のダヤク人を呼び寄せ、家を焼かせ、住民のほぼ全員を殺害した [林 2010:18-23]。

事件の経験者の目に焼き付いているのは、ダヤク人の頭に巻かれた赤い鉢巻であり、これは紛れもなく戦の開始の儀礼を済ませた後のダヤク人が使用していたものである。このような華人に襲いかかる悲劇は1968年になっても各地で報告された [林 2010:26-30]。

ここまで記述してきた、国境近くで起きたマジユン事件と国境から比較的遠いスナキン事件を比較すると、マジユン事件では華人虐殺が起こっているのに対し、スナキンでは華人の財物の略奪は起こっているものの、大量虐殺は起こっていない。ファン・フルテンの記述に出てくる赤い鉢巻の儀式の条件に「殺してはならない」というものがあり、基本的にダヤク人はそれに従って行動した。マニユケ人による過激な行動はあったにせよ、殺害は大規模なものにはならなかった。

それと比較して、軍人が多く派遣されていたマレーシア国境近くにおいては、マジユン事件に代表される華人の虐殺が起こっている。これは、国境から離れた地域で起こったダヤク人による略奪とは別のものとして把握されるべきであろう。虐殺事件には軍人の影が付きまとい、軍の司令でダヤク人の暴徒による華人殺害が起こった。軍人はダヤク人の反華人の溢れかえるエネルギーを巧みに利用したのである。

これと比較対照されるのが東ジャワの共産党員虐殺の実情である。そこでも軍人による巧みな情報操作やプロパガンダ戦略など積極的な働きかけがあつてこそ、大量虐殺が生じたことが強調される [倉沢 2011]。インドネシアの軍人はジャワで行った民衆扇動策を西カリマンタンのダヤク人に対しても行ったと言えよう。また一方で「失地回復」を願うウライの勢力があり、この両者の利害が一致するところに華人追放と局所的な華人虐殺が生じたのである。

(3) 軍人の関与

1967年6月のリャクドゥ更迭の後、シリワンギ師団を率いたのはウィトノ・サルソノであったが、デイヴィッドソンが引用している軍の内部文書には次のように書かれている。

「現在、我々の敵は明確な 1 つの民族集団 (satu etonis sendiri) であり、彼らは独自の社会と我々には理解できない言語を持っており、これが我々の諜報活動を困難にしている」 [Davidson 2002:63]。これは当時、ウィトノ・サルソノ率いる軍が華人という民族集団全体に敵対心を抱いていたことを表している。

また、西カリマンタンの華人の 80% が親ゲリラであるという宣伝をしていた軍部に対して、従軍神父のドゥーラ神父は疑問を呈し、軍の公式文書においてはゲリラの活動は国境地帯に限られており、700 人程度の規模でそれほど大きくはないと記述されていたことを証言している [Doera 2003:114]。ゲリラの危機を誇大に宣伝することで、軍は華人に対する抑圧を強める口実を見つけたとも言える。ほぼこの時点で、共産主義者と華人を同一のものとして扱う方針が固まっていることが見てとれる。

その上で、軍はダヤク人の間に華人に対する憎しみが起こるよう画策した。9 月、10 月に、ブンカヤンの近くで一連のダヤク人殺害事件が起き、華人のギャング集団の仕業とされた [Davidson 2002:63]。このデイヴィッドソンの記述は、前に引いたドゥーラ神父の証言と符合する。

軍としては、ゲリラ討伐のためと言いながら、次第に華人に対して人種主義的な扱いをするようになるのである。ドゥーラ神父も「軍に扇動されたダヤク人による示威行動は、共産主義ゲリラの同調者に向けられたものであったが、誰がそうであり、誰がそうでないか区別ができず、結局当初の軌道を外れて、すべての華人に向けた示威行動となった」と述べている [Doera 2003:110f.]。

タンジュンプラ第 12 軍管区を 1968 年 6 月から 1972 年まで率いたスマディ (Soemadi, 生歿年不明) はこの軍部の作戦遂行についてどのような考え方を持っていたのであろうか。彼は 1970 年代に、華人追放作戦についてその必要性から解き明かし、その作戦の詳細を記述した著書を出版している [Soemadi 1974]。この著書において、彼は華人の追討とダヤク人に対する扇動について語っている。誇張はあるだろうが、ダヤク人の華人に対する蜂起に確実にインドネシア国軍が関わっていたことの証拠となる。

スマディは、影響力のあるダヤク首長は共産主義者を支持していると述べ⁽²⁰⁾、この状況を打開するために複数の地域のダヤク人首長を集め、「共産主義ゲリラに味方するものは、鶏や豚と同じように首を切ることができる」と言い聞かせた [Soemadi 1974:94]。軍はダヤク人の勝利の度に祝宴を開き、そこで酌み交わされる酒は殺害された華人の頭蓋骨に注がれたという。また勝利に貢献したダヤク人を表彰しメダルや賞品を贈ることで、彼らの首狩りへの士気 (semangat memenggal kepala, ngayau) が高まったと述べている [Soemadi 1974:96]。

このように、ダヤク人の蜂起に軍人が少なからず関わっていたことは、様々な資料からほぼ確定できるのである。

(4) 西海岸部における暴力的事件

前に、デイヴィッドソンによる1967年事件の3つの局面の分類に触れたが、その3つ目に当たる事例として「活閻王による華人虐殺」を取り上げる[林 2010:17]。林世芳の簡潔な記録に基づき、筆者はシンカワン近郊の数か所で聞き取り調査を行った。

「活閻王(客家語で sang nyam bong と発音される)」は、筆者が行ったインタビュー結果を総合した結果、ジャワから派遣されたシリワンギ師団機動部隊の一員のスンダ人であり、本名はスマディ(Sumadi、軍司令官のスマディとは別人物である)あるいはスマイリー(Sumaily)であることは分かっている。「活閻王」とは、「活きた閻魔大王」ほどの意味であるが、周囲の客家人によってスマディに付けられたあだ名である。「活閻王」による虐殺を逃れたY氏(1933年生まれ)は、筆者がインタビューに訪れた時、上半身裸であった。彼の喉元、鳩尾、膺の右には生々しい傷跡があった。次が聞き取り結果の要約である。

彼はシンカワン近郊のスンガイ・ルック(Sungai Ruk)で生まれた。ある朝、水田で仕事をしている時、彼の子供は家にいてラジオを聞いていた。隣近所のムラユ人が、ラジオの放送が外国語でなされているのを聞いて、このことをスンガイ・パンカラン(Sungai Pangkalan)⁽²¹⁾にあった軍隊の詰め所に報告した。しばらくしてムラユ人の自警団(Pertahanan Sipil, Hansip)の2人がやってきて、彼に対してすぐに軍隊の詰め所に出頭するように、と言い渡した。その時すでに、自警団のムラユ人は彼のラジオを没収し、詰め所に持って行っていた。彼は詰め所に拘留された。

活閻王は中国語のラジオ放送を聞いていただけで、彼を共産黨員、ゲリラ支援者だと決めつけ、彼の殺害を宣言する。詰め所には、彼の他に抑留者が25人いた。

いよいよ翌日に殺害されると思い、殺されるよりはとあって彼は自殺を図った。彼によると、神がかり状態⁽²²⁾で首を3度刺し、その後鳩尾と腹を刺したという。しかし死ぬまでには至らなかった。彼は無意識のうちに裏口から脱出し海岸に向かって走った。民家近くの中国寺廟の前で力尽き、倒れているところをRT長(Rukun Tetangga, RTとは住宅の最小区画)に助けられた。その後彼は救急車でシンカワンの病院に運ばれた。手術を施されたが助かる見込みがないと思われ、霊安室に入れられたという。

彼は命を取り留めた。その間も活閻王から詰め所に戻るよう催促があった。しかしレントウ(Luntuh)という名の村落指導団体(Badan Bimbingan Desa, Babinsa)の長はそれをさせなかった。退院後、彼はレントウ氏の家に数カ月住んだ⁽²³⁾。以上が要約である。

また、スンガイ・パンカラン近くに住む家族が筆者に語ったところによると、関春華という華人がこの事件に関わっていたという。彼は活閻王の愛人の兄であり、彼が活閻王に殺害するべき人の名前を報告していた。関春華は、活閻王の事件が終息した後、付近の住民に殺害され、その死体はスンガイ・パンカランの道端に捨てられた。彼の密告のために多くの人の命が犠牲になったので、付近の住民の恨みを買ったからだと言われる⁽²⁴⁾。

1971 年から現在までスンガイ・パンカランにて椰子油の精製業を営んでいる葉氏は、スンガイ・パンカランの周辺には 1974 年まで多くの軍人がおり、辺りの森に入っては警備していたと証言した⁽²⁵⁾。1974 年は、インドネシア共産党の首領ソフィアンが捕えられ処刑された年である。1970 年代に入って、インドネシア共産党は内陸部のサンガウレドから華人が多い西側沿岸部に活動の舞台を移していた [林 2010:17]。軍は沿岸部の警備を必要としたのである。

ダヤク人に追われて、あるいは軍に護送されて、シンカワン、ポンティアナックに流入した華人は約 6 万人と言われている [Davidson 2002:72]。この難民の数は、現在のシンカワン人口が 20 万規模であることを考えると相当な量の人の移動であったと言える。彼らはこの後、軍の厳重な監視下に置かれることになる。

難民が流入した地域では、上に見られるように、保身のための裏切り行為、疑心暗鬼が華人の間で跋扈した。それほど大規模ではないが、相手が華人というだけで、共産党関係者、ゲリラ支援者という疑いをかけて虐待、殺害するというも行われていたようである。華人追放事件というダヤク人による追放事件のみが注目を集めるが、このように難民となった後も華人は、理由なく告発され殺害される恐怖と緊張を強いられていたことがこれらの話から浮き彫りとなる。

難民はインドネシア語を話せなかった。言葉の障壁が軍人を苛立たせたことは想像に難くない。ダヤク人に対しては「インドネシア化」が図られる一方で、華人に対しては軍部による抑圧、監視が続いた。当時華人は、政治問題には関わらず、身を守るためにできるだけ目立たないようにしていた。このような「自粛」ムードが 1980 年代初めまで続いた。現在でも共産主義の「共」の字を見るだけで手が震えるというシンカワン在住の華人の話も聞く⁽²⁶⁾。このように華人自身の中にインドネシアに対する恐怖心が植え付けられたのである。

追記すべきは、「華人追放事件」によってダヤク人と華人の仲が永久に引き裂かれたというわけではなく、現在では元の良好な関係に戻っている点である。1970 年代からたびたびダヤク人とマドゥーラ人の中での争いは起こっており、最大規模の紛争は 1997 年に起こったのであるが、この際ダヤク人の標的になったのはマドゥーラ人のみであり、華人に対してダヤク人が攻撃を加えることは一切なかった。華人も少しずつ内陸部に戻りつつあるが、いまだに内陸部は華人が非常に少ない。この状態は、1967 年に起きた華人追放の影響を反映している。

おわりに

1950 年代、インドネシア国家の存在を具体的に知らなかった西カリマンタンの華人は、1965 年 9 月 30 日の政変を契機とする 1967 年華人追放事件によって、否応なくインドネシ

アという国家と正面から対峙することとなった。この地域の華人にとって、真実味を帯びることになったインドネシアは軍服を着ていたのである。

西カリマンタンにおける華人追放事件については、これまで新聞報道やインドネシア陸軍の資料を用いた研究が主であったが、筆者はこれに対して、この事件に関わった当事者たち、しかもさまざまな立場にあった人の証言を互いに照合することによって、事件の全体構造を分析した。

1967年7月のインドネシア国軍基地攻撃事件については、実際に攻撃に関わった人物からの情報をもとに記述した。また、その年の10月に起こったダヤク人による赤い鉢行動にはインドネシア陸軍、より具体的には、ジャワから派遣されたシリワンギ師団機動部隊が直接的に関与していたことが明らかになった。また、先行研究には一切登場しないことであるが、この事件が客家人社会の中で「紅頭事件」として記憶されているのは、戦いのいでたちをしたダヤク人から立ち退きを命じられた華人の、この事件に対する印象がいかに強烈だったかを物語っている。

一口に華人追放事件と言っても、地域によって起こり方に差があることは幾つかの研究で指摘されており、主に関わったのはマヌケ人であることも分かっているが、それでは、具体的に地域によってどのように違うのかという問題まで踏み込む研究はなかった。これに対し筆者は、最近になって発表された、共産主義者ゲリラによる記録 [林 2010] や自身で行ったインタビューにより、地域ごとの特徴を分析した。その結果、マレーシア、インドネシア国境地域では、局所的に華人の大量殺害が起こっており、これはインドネシア国軍の指揮系統のもとに行われたことが明らかになった。しかし、比較的国境から離れた地域においては、同じく華人追放が起こっているが、これは軍人の指揮管理のもとでというよりも、ダヤク人のイニシアチブの方が優勢であり、このようなところではダヤク人による放火、モノの略奪はあっても殺害に及ぶことは稀であった。このように、華人追放事件は大きく2つのパターンに分けられるのである。この事実はこれまでの軍資料のみをもとにした研究では分からなかったことであるが、筆者はこれを、華人側の資料、また従軍神父であったドゥーラ神父の証言などを踏まえて描いた。

また、軍司令官を務めたスマディ氏が1970年代に刊行した著書のなかに、華人追放事件への積極的な軍の関与を自ら認めている（誇っている）箇所が多数あり、事件へのインドネシア陸軍の関与の動かぬ証拠となっている。最後に挙げた「活閻王」の事例は、シンカワン付近では有名な話である。華人住民を共産主義者扱いして殺害する行為が起こったことも、この事件の一つの重要な側面として記述する必要があると考える。またこの時代のシンカワン付近においては、華人社会内で軍人に自分の知り合いを密告するような行為もあったようであり、華人社会の中でも人々は恐怖と不信の中で生きなくてはならなかったと言えよう。

[注]

- (1) 客家人は現在、中国華南地方の山間部に多く住み、その社会は多種の言語集団に分けられる。東南アジアへの移民では、銀、錫、金の鉱山労働者としての移民が際立っている。
- (2) 中国大陸汕頭周辺を故地とする民族集団であり、東南アジアでは商業、漁業に従事することが多い。
- (3) ジャワ東部のマドゥーラ島を出身地とする民族集団で、敬虔なイスラム教徒としての自意識を持っている。西カリマンタンへの移住は19世紀から既にあったが、スハルト政権期にその数は飛躍的に上昇した。
- (4) 現在でも「ムラユに入る (masuk melayu)」と言えば、イスラムへの改宗を意味する。
- (5) ウファン・ウライは、西カリマンタン最奥のカブアス・フル県の出身で、インドネシア独立まもない時代に、ダヤク人を束ねてダヤク人全体の利益をインドネシア国政において主張していた人物であり、スカルノも西カリマンタンのダヤク人を代表する人物として彼に配慮していた。
- (6) 1950-60年代、インドネシア共和国をイスラム国家とすることを目標に掲げた中央政府に対する反乱であり、特に1950年代、国内の大きな不安定要素となった。
- (7) 1958年、スカルノらの左傾に反対した政治家らがスマトラ島中部に位置するブキットティンギ (Bukittinggi) を本拠地に定めて結成を発表した臨時政府であるが、すぐにインドネシア正規軍に鎮圧される。
- (8) ダヤク人はこの示威行動をデモンストラシ (demonstrasi) とインドネシア語で呼ぶ。
- (9) 現在、ポンティアナックにある西カリマンタン博物館にも数種類の「鉢」の例が陳列されている。
- (10) トーマス・ムラド氏へのインタビュー、2010年11月20日。
- (11) イサク・ドゥーラ神父は、東インドネシアのフローレス島生まれの神父であり、1966年から71年までの間タンジュンブラ第12軍管区の専属神父として華人追放事件に直接接した。
- (12) ドゥーラ神父へのインタビュー、2011年3月8日、2012年1月3日。
- (13) ドゥクン (Dukun) は広くインドネシアで霊媒を指す。
- (14) ドゥーラ神父へのインタビュー、2012年1月3日。
- (15) ドゥーラ神父へのインタビュー、2011年3月8日。
- (16) これは、明らかに6月末に行われた、軍部のスタッフ総替え、シリワンギ師団の着任を背景とした変化である。
- (17) ポンティアナックの北60キロの地点にある場所であり、日本占領期以前から日本人が住んでいたとされる場所がある。沼地が目立つ場所であるが稲作は盛んである。
- (18) サマランタンの住民へのインタビュー、2010年11月19日。
- (19) トーマス・ムラド氏へのインタビュー、2010年11月20日。
- (20) スマディには、危機的状況を可能な限り強調するという政治的意図があったと思われる。ドゥーラ神父は、筆者とのインタビュー (2011年3月8日及び2012年1月3日) の中で、特にスマディ氏が着任した1968年時点では、既に共産主義ゲリラはほとんど勢力を持っていなかったのであり、「スマディ氏は敵を自ら作り出さなくてはならなかった」と述べた。

- (21) シンカワンから南にスンガイ・ドゥリ (Sungai Duri) に行く行程の中間地点にある。
- (22) 彼によると、その時、関聖帝爺 (中国三国時代の武将、関羽が神格化されたもの) が彼に乗り移っていたのだという。
- (23) Y氏へのインタビュー, 2010年11月15日。
- (24) スンガイ・パンカラン近くに住む家族へのインタビュー, 2010年11月17日。
- (25) 葉氏へのインタビュー, 2010年11月17日。
- (26) 呉氏へのインタビュー, 2011年1月31日。

[参考文献]

日本語

- 倉沢愛子, 2011: 「インドネシア9・30事件と社会暴力」『岩波講座 東アジア近現代通史8』岩波書店, 171-193 ページ。
- 戴國輝, 井草邦雄, 1974: 「9・30事件前後のインドネシア華人・華僑事情」, 戴國輝編『東南アジア華人社会の研究・下』アジア経済研究所, 159-180 ページ。
- 原不二夫, 2009: 『未完に終わった国際協力: マラヤ共産党と兄弟党』風響社。

英語

- Coppel, Charles, 1983: *Indonesian Chinese in Crisis*, Kuala Lumpur: Oxford University Press.
- Davidson, J. S. and Douglas Kammen, 2002: "Indonesia's Unknown War and the Lineages of Violence in West Kalimantan," *Indonesia*, Vol. 73, Cornell University, 53-87.
- Davidson, J. S., 2008: *From Rebellion to Riots: Collective Violence on Indonesian Borneo*, Madison: University of Wisconsin Press.
- Feith, Herbert, 1968: "Dayak Legacy," *Far Eastern Economic Review*, January 25, 134-135.
- Hara, Fujio, 2005: "The North Kalimantan Communist Party and the People's Republic of China," *The Developing Economies*, Vol. XLIII, No. 4, Institute of Developing Economies, 489-513.
- Hui Yew-Foong, 2007: "Stranger at Home: History and Subjectivity among the Chinese Communities of West Kalimantan, Indonesia," Cornell University Dissertation.
- Mackie, J. A. C., 1976: "Anti-Chinese Outbreaks in Indonesia, 1959-68," J. A. C. Mackie (ed.), *The Chinese in Indonesia: Five Essays*, edited by J. A. C. Mackie, Honolulu: University of Hawaii, 77-138.
- Porritt, Vernon L., 2004: *The Rise and Fall of Communism in Sarawak 1940-1990*, Clayton: Monash Asia Institute.
- Somers Heidhues, Mary, 2003: *Goldiggers, Farmers, and Traders in the "Chinese Districts" of West Kalimantan, Indonesia*, Ithaca: Cornell University.

インドネシア語

Doera, Isak, 2003: *Memori pelaksanaan tugas sebagai pastor militer*, Jakarta: Yansol Mentari.
Hulten, Herman Josef van, 1992: *Hidupku di antara suku daya: catatan seorang misionalis*, Jakarta: PT Gramedia Indonesia.

中国語

林世芳, 2010:『西加風雲』 Malaysia, Sarawak, Bintulu: 砂隆印務有限公司 (Sadong Press Sdn. Bhd.)。

資料

南中特刊委員会編, 2009:「山口洋南華中学創校六十周年記念特刊」。
成南徳、鐘保華編, 2008:『歲月殘痕: 情牽故郷山口洋』。
Soemadi, 1974: *Peranan Kalimantan Barat dalam menghadapi subversi Komunis Asia Tenggara*, Pontianak: Yayasan Tanjungpura.

インタビュー

Y氏 (匿名), シンカワン, 2010年11月15日。
スンガイ・パンカラン近くに住む家族, 2010年11月17日。
葉氏, スンガイ・パンカラン, 2010年11月17日。
呉氏, シンカワン, 2011年1月31日。
サマランタンの住民, 2010年11月19日。
ダヤク首長, トーマス・ムラド氏, サマランタン, 2010年11月20日。
イサク・ドゥーラ神父, ジャカルタ, 2011年3月8日, 2012年1月3日。